



ALLENGER

NAKAMURA NOBUTO

スポーツコミュニティ株式会社 代表取締役

中村伸人

1974年生まれ、神奈川県出身。スポーツ専門学校の教員になる道を選び、27歳で独立。運動を通じて人間教育を行う事をモットーに、スポーツ施設などのスペースで器械体操に特化した教室を展開。スポーツビジネス全般に精通した、業界のリーディングカンパニーとなる。

数少なくなった「人間教育」の場を広げ 次世代の社会形成に貢献していきたい

幼い頃に体験して身についたことは、大人になっても簡単に失われることはない。子どもたちに成長体験を実感させることで次世代の人間教育を担い、自らも成長していく。中村伸氏が掲げる「共育」の理念と、その挑戦とは。

小

学生を対象にした体操教室を全国に展開する、スポーツコミュニティ株式会社。自社施設を一切持たず、各地の体育館やスポーツ施設を借りるスタイルで、全国に約600の教室、15000人の会員を擁する。老舗企業の間隙を縫って急成長を遂げ、業界内ではトップ3に迫るポジションにまでたどりついた。その成長の理由はやはり「箱を持たない」という効率経営にあるのだろうか？「それはもちろんです。もうひとつはサービスの差別化ですね。体操教室は幼稚園児を対象にしたところが多いのですが、当社は小学生にターゲットを絞っています。そこが他社とは大きく違うところです」。親が子どもにさせたい運動系の習いごとは、水泳と体操がトップだと中村氏は言う。それだけ高いニーズが市場にはあるのだが、さらなる差別化として中村氏は人間教育という理念を据えた。「一般に、体を動かす楽しさを子どもたちに実感してほし

い……というのが多くの体操教室のコンセプトです。もちろん当社にもそうした考えはありますが、それ以上に重視しているのが『運動を通じた人間教育』です。これは当社の社員も共通して持っている、大切な理念です。

中

村氏自身、体操一家の家庭に生まれ、子どもの頃から大学時代まで体操一本で育ってきた。その中で知らず知らずのうちに、多くのことを学んできた。体育系専門学校の講師を経て独立するにあたり、スポーツを通じてこそ得られる学びを、子どもたちに伝えたいと考えた。「スポーツは非認知能力……数値化できない、人としての能力を高めてくれます。また体操は自分との闘いという面があります。それまでできなかったことが、努力を重ねてある日できるようになる。その時、子どもたちは成長を実感できるんです」。誰にでも憶えがあるだろう。6段の跳び箱を、どうしても跳べない。悔しい。アイツはあんなにあっさり跳んでいるのに……何が違うんだらう？ 助走か、踏み切りか、それとも手のつき方が違うのかな？ 考えて、あれこれ試してみる。何度も失敗しながら練習を繰り返す。走り方もフォームも少しずつ変わっていき、ある

日、跳べなかった跳び箱を跳べるようになる。その時、子どもは成長の階段をひとつ昇る。

「子どもたちが成長していく姿に触れることで、私たち大人もさまざまな感情に出会い、教えられていきます。つまり子どもたちの成長は、私たちの成長でもあるのです」。これこそ中村氏が自社のモットーとして掲げる「共育」だ。子どもたちを指導教育しながら、自分たちも学び、成長していく。同社ではすべてのスタッフがこの思想に共感し、日々の業務にあたって

子

どもの頃、人として大切なことは、周囲の大人や先輩が教えてくれたものだった。だが昨今ではそうした風潮も薄れている。学校での部活動も時代とともに様変わりし、上下関係の中での人間教育という面が薄れているように思う。と中村氏は語る。だからこそ成長の場を提供し、次の世代に残したい。大きな声で挨拶し、弱きを助け、感謝する心を持つ。そんな子どもたちを育てたい。それには自分たち自身も組織として成長しなくてはならない。「この仕事は、社会貢献事業なんです。ということは、当社の会員数×継続年数が貢献度の大きさになる。その数値を上げるために活動拠点をさらに増や

し、組織を大きくしていきたいと考えています」。現時点での目標値は、あと5年で会員5万人の達成。拠点の増設はもちろんとしても、今後も少子化傾向が続くこの時代には少々高すぎるハードルにも思える。だが中村氏は海外への展開も視野に入っていた。「アジアへの進出を考えています。国によっては文化的に日本と近く、受け入れられる素地はある。体を動かすことだけでなく、公衆マナーや道徳性も教えていければと思っています。実際にそうしたニーズはありますので」。急速な経済発展を遂げるアジア諸国だが、それに伴う問題も少なくない。象徴的なのは環境問題で、これは高度経済成長期の日本と同じだ。しかし他者に気遣い、弱者

をいたわる精神を子どもたちに伝えられれば、やがては国全体を変えていくエネルギーに結実していくのではないかと。夢は大きく膨らんでいく。「ただ何をやるにしても、日本ではスポーツそのものがほとんど収益化されていません。プロスポーツでも数えるほどしか収益構造ができていない。ビジネスとして成り立っていないんです。またアマチュアの世界では複数の競技団体が乱立していて統一がとれず、混乱を招く要因になっています。まずこうしたところを見直していかなければなりません」。大きな目標を掲げながらも、自分の足元から固めていく。夢の実現に向けた中村氏の歩みはゆっくりと、しかし着実に前進している。

CHA

The Extra Edge

世の中のトレンドをリードする
話題のモノ、ヒト、コトなどを紹介